

一、答えは、すべて解答用紙に書きなさい。

二、字数制限のある問題では、句読点や記号も一字に数えます。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

長く技術畑(研究の専門は建築構造材料である)で仕事をしてきたおかげで、僕は沢山の技術者を知っている。もちろん、自分も技術者の端くれだと思っている(研究者、学者よりは、この肩書きが自分にしっくりくる)。さらに、工作が大好きなので趣味の分野でも多くの友人ができて、みんな多かれ少なかれ技術者である。

これらの人たちの中には、もの凄い達人がいて、彼らの技に出会うこと、それを間近で見るとは、本当に感動ものだった。とにかく「凄い」と感じる。どうして凄いと言われるのかというと、僕自身がまったくの素人ではなく、少なくとも作ることを実践してきたし、指先でそれを感じてきたからだ。なにも知らない人には、きつとどこがどう凄いのが充分にはわからないだろう、と思う。「技術の凄さ」とは、説明することが難しい。凄さを感じるだけでも、ある程度の技量が要求されるものだ。

A 一方で、この種の凄い人たちは、自分では滅多に文章を書かない。書いたとしても、大変控えめな、図のキャプション的な単文だ。僕がこの目で見て、あるいは自分で試してみても、「ここが凄い」と感じたところは、残念ながら、文章で読める機会がほとんどない。これは当然だろうと思う。「作品をじっくりと見ればわかるだろう」という精神こそ、この世界を基本的に貫くものだし、それは僕もそのとおりでと考える。ただ、普通の人、あるいは初心者には、「じっくり見る」だけの目がな

い。だから「凄さ」は「香り」程度にしか伝わらない。

B 技術の「神髄」というものは、文章で説明ができないものである。逆に、文章化が本来できないようなもの、それこそが技術の核心的「センス」だともいえる。

C 剣術や舞踊などでも同じだろう。日本には茶道、武道、華道など、さまざまな「道」がある。これらも、大部分のノウハウが文章化できないはずだ。師匠について、長年の鍛錬によって、体で覚えるものとされている。「技術」もまったくこれと同じ要素を持っている。だからこそ、文章化が無意味であり、見て、感じて、習得するものだ、という伝授方法が一般的に確立したのである。

D 技術を「技道」にしない姿勢こそが「工学」「テクノロジー」の基本である。20世紀の工学の発展は、まさにそこに特徴がある。それまで伝統的な「工芸」であったものを、「工学」として、教えることができるもの、伝えることができるものにした。大勢で共有することができる「技術」として展開させてきたのだ。その展開の過程では、技術の一部は数字や言葉に置き換えられ、つまりデジタルになった。さまざまなものをマニュアル化し、誰にでも技術が使えるようにしたのだ。

E が育てた人間が、工業に依存した現代社会を支えている。日本では、第一世代がようやく主要なメンバになったのが20世紀後半だったが、彼らは、技術革新を目的にした世代であり、どちらかといえば、まだ体で覚えた世代だった。それは、彼らの師匠が F で育てた人間ではなく、G から突出した達人だったからだ。

H の師匠にいた世代であり、学校で習った「知識としての技術」しか持っていない。しかし、その後の第二世代は、知識の量が爆発的に増加したので、どうしても知識入力学習の大部分にならざるをえなかったからだ。

こうして、数字や文字に展開されたデジタルのデータだけで、もの作りをしなくてはならなくなった。そこには、アナログからデジタルへの変換でウシナワレタものがカナラズあるだろう。かつては「身につけていた技術」が、データやマニュアルの中にはないからだ。

(注)

- ※1 神髄 : 一番大切なところ。
- ※2 ノウハウ : やり方。
- ※3 テクノロジー : 科学技術や工業技術。
- ※4 マニュアル : 手引き書。
- ※5 メンバ : メンバー。構成員。

(森博嗣『創るセンス 工作の思考』による)

問1 線部aの漢字については読みをひらがなで書き、b、c、dのカタカナについてはそれぞれ漢字で書きなさい。ただしb・cについては、送りがなも正しく書きなさい。

問2 空らん A D に当てはまる言葉として最も適当なものを次のア、イ、ウ、エ、オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア しかし
- イ そもそも
- ウ だから
- エ たとえば
- オ また

問3 線部①「自分も技術者の端くれだと思っている」とありますが、この言葉にこめられた筆者の思いとして最も適当なものを次のア、イ、ウ、エから選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が技術者にすぎないのは仕方ないと思っている。
- イ 自分は一人前の技術者に早くなりたと思っている。
- ウ 自分も技術者の一人であると思っている。
- エ 自分を技術者と呼ぶにはほど遠いと思っている。